

(資料2)

「身近な自然を活用する環境教育」、「地域の教材化（地域学）」

の教育的意義とどんな能力の育成になるかについて

課題について、わかりやすく整理して論述するために、地域の教材化の教育的意義については項目毎に整理して主として学習者の視点から説明し、必要に応じて、(a)指導者の視点、(b)社会や地域の視点を付け加える。また、項目毎に、その項目で育成される能力についてまとめ、最後に括弧（ ）で育成される能力を上げる。

そして最後に、教育課程部会で議論された今日的課題（基礎的・基本的な知識・技能の習得、自ら学び自ら考える力「生きる力」の育成、言葉と体験の重視、学校と家庭や地域社会との連携など）を取り上げ、その課題に対する意義や役割も述べる。

- (1) 実物・実体験に基づいた学習ができる。
- (2) →体験に裏打ちされた知識は、子どもが具体的なイメージを持てるので、長期的に記憶される。それにより学んだことを忘れにくくなるので、学力が定着する。(基礎学力の定着)  
→教科書を通した一面的な知識でなく、実物から自分の興味に基づいた多様な情報が引き出せるので、学習者の興味・関心が喚起される。(興味・関心の育成)  
→地域（本物）の自然は、教科書の記述通りでないこともあることを発見できる。(批判的思考力)
- (3) 学んだ知識を日常生活と関連づけられる。  
→学校で学んだ内容が、生活の場所（地域）で応用できるので、学ぶ意味を見いだせる。(応用力の育成、学ぶ意味の理解)
- (4) 地域の環境に関心を深めるだけでなく、郷土愛を育むことができる。  
→地域を使った野外学習を行うと、子どもはゴミ問題など環境問題に関心が向く。それだけでなく、地域について深く知れば知るほど郷土に対する愛着心が増す。(興味・関心・郷土愛の育成)
- (5) 地域の身近な自然で、美しさや不思議に思うことなどを発見でき、また、専門家も解明していない発見に気づき、探究する意欲を高める。→地域の自然には不思議なことや解明されていないことが沢山あることを専門家から直接学ぶ機会は、子どもが解明されていない地域の自然を探究する動機付けになる。(学ぶ意欲の育成)
- (6) 課題の発見が容易であり、テーマを長期的に探究することができる。  
→子どもが自ら見つけたテーマで、長期的にデータを収集でき、インターネットで調べ、データを分析しまとめを行うなど、科学する態度や技能そして表現する能力を身に付けられる。(技能・表現力の育成、科学的思考力の育成、興味・関心の育成)
- (7) コミュニケーション能力を身に付けることができる。  
→実物・実体験を通して、実物との対話（インタープリテーション）、学習者間の対話（コミュニケーション）、学習者と社会の対話（コミュニケーション）を行う能力を身に付けられる。(コミュニケーション能力の育成)
- (8) テストのための学習でなく、地域の教材を開発することを通して、文化作りに参加できる。

→子どもが地域の自然について調べたことは研究としての価値もあり、学生科学賞へ出すこともできる。子どもは地域の自然の調査を通して、自分のアイデンティティと地域のアイデンティティを示すことができる。(a)指導者は、それらの成果を長期的にまとめると地域の教材開発をすることができる。それは地域の文化作りへと発展する。理科の教師は、長期的に地域の自然を生徒と調査することで、ミニ学芸員的な素質(指導力)を身に付けることができる。また、地域の教材を開発する中で、地域で発見した色々な標本がたまり、理科室が博物館のようになる。学校が地域文化の発信地の一部となる。(自尊心の育成)(指導者の育成(教材開発能力の育成、カリキュラム開発能力の育成))(文化作り:創造力の育成)(発信力(表現力))

(9) 全ての教科で関わるので、総合的な学習を展開しやすくなる。

→(a)地域を利用すると全ての教科に関連することができる。それは、総合的な学習を創造していく上で、有効な手段である。(指導者の育成(カリキュラム開発能力の育成))

(10) 学校を中心とした地域に学びのネットワークができる。(b)(社会や地域の視点)

→地域の自然を利用した学習を行っている、地域の自然に詳しい人との出会いがあり、地域のネットワークが形成できる。(コミュニケーション能力の育成)

(11) 地域の自然を地球の悠久の歴史の中に位置づけ、現在の自然を時間軸の視点から見ることができる。それは、人間の本質、人間の存在を考えるきっかけになる。

→自然を探究する力を身に付けると、長い地球の歴史の中で人間(自分)の存在について思考する能力を身に付けるきっかけになる。

(12) 地域を探究する中で、地域のアイデンティティーを理解でき、他の地域との比較、更には世界との比較する基盤を身に付けられ、Act locally and think globally(地域で行動し、地球規模で思考する)ことができるようになる。

→(a)(b)世界的な教育の動向として、地球環境に配慮できる人間を育成を目指した「持続可能な開発のための教育」が2005~2014年で行われる。その教育は、地域のネットワークや地域の土着の知恵など地域を重要なポイントとしている。日本ではその教育を総合的な学習の時間に行うことになっている。地域の自然の教材化は、その教育を実現するために必須のことである。

以上述べた理由により、地域の教材化は、子どもの知識・理解を定着させるだけでなく、地域と学んだこととの関連により学ぶ意義を理解でき意欲を喚起するきっかけになる。また、地域の身近な自然を利用することで、探究的な学習・問題解決的な学習を容易に展開できるので、自ら学び自ら考える力「生きる力」を育成しやすい環境を作れる。地域を使った学習を展開すると自然に学校外の施設や人材と繋がりができ、ネットワークが構築できる。これらの教育的課題を実現するためには指導者育成(教師教育プログラム)の開発が必要である。子どもにとっては、生きる力を育成する能力の開発になり、指導者にとっては、教える能力(教える能力)、子どもの研究を支援する能力(ファシリテーターとしての能力)、共に学ぶ能力(学習者としての能力)、他教科の教師または学校外の人材と教材やカリキュラムなどを開発する能力(コーディネーターとしての能力)など生涯学習能力を育成することになる。